

Fontaine

vol. 27

発行日 2010年3月25日
発行/岸和田文化事業協会〒596-0073 岸和田市岸城町5-10
岸和田市立自泉会館内
TEL/FAX 072-437-3801
Email:fontaine@sensyu.ne.jp
http://www2.sensyu.ne.jp/fontaine/

芸術文化を
生み出したり
支えたりする
主体は誰なの
か。政府か、
市民か、そし
て企業も関与
するのか。ナ
チス・ドイツ
やソ連など、

国家が過去に芸術文化を利用・統制・抑圧したことはよく知られている。日本も戦前の翼賛体制の反省から、政府は芸術文化と一定の距離を保ってきた。しかしこの20年ほどで、政府の芸術文化への距離感も変化しつつある。一方で、市民の芸術文化への関わり方も近年ますます議論されるようになってきている。そんな中で、市民が主体となるということをはっきり意識して文化事業等を実施する先駆的な例が、岸和田文化事業協会（以下、事業協会）と言えるだろう。

事業協会の場合は提供する側は市民であるとして、享受する側（受益者）は誰であろうか？ 受益者は言うまでもなく市民であるべきである。そして、事業協会は何を市民に提供するのだろうか？ コンサートを例にして考えてみよう。

コンサートの聴衆は、チケットを買ってコンサートに来場する。では、聴衆は（多くの場合は紙に印刷された）チケットを求めているのか？ もちろんそうではない。チケットはコンサート会場に入場する権利を得たことを証明するものであり、聴衆は物理的なチケット自体を欲しているわけではない。では、聴衆はコンサートに行くことによって何を求めているのか？ 生の音楽なのか？ それとも生の音楽を聴いて過ごす時間なのか、感動を得ることか？ そのコンサートを聴くことによって感動を得る人もいるかもしれないが、人によって場合によっては感動しないかもしれない。ま

マーケティング思考のすすめ

静岡文化芸術大学准教授

中尾 知彦

た、コンサートをデートの場に利用するなど、少し違った目的で来場する人もいるかもしれない。コンサート会場での美しい音楽によって、睡眠時間を得る人もいるかもしれない。

マーケティングではこれらを「便益の束 (Bundle of Benefits)」という言葉で表現する。セオドア・レビットは1960年に発表した「マーケティング近視眼 (Marketing Myopia)」という有名な論文の中で、非常にわかりやすい例を挙げている。われわれは自動車に乗るとき、ガソリン・スタンドでガソリンを買い求める。ところが、ガソリン自体が欲しくて購入しているわけではない。われわれはガソリンという物質を求めているわけではなく、移動という「便益」を求めているわけである。そして、その便益は通常はただひとつではなく、複数のものが含まれているので束と表現する。

事業協会は、音楽や美術などといった芸術を提供すると考えるよりも、どのような便益を提供できるのか、また提供すべきか、という逆転の発想で考えてみてはどうか。便益はその場で得られるものとは限らない。時間をおいて得られるものも含まれる。青少年期の芸術鑑賞の経験があるがために、大人になってからも芸術が身近にある豊かな生活が送れるというのも便益のひとつであろう。更に、クリエイティブ・クラスが増えることによって、都市が創造的なものになるというのも、かなりマクロな視点の便益であろう。そしてそれらの便益を、どのようにプロモーションして現在の聴衆と潜在的聴衆層に知覚させていくかが、芸術文化のマーケティングにおいては更に難しい問題となる。

これら便益の束を市民の力によって提供していくというのが事業協会の基本理念であるので、職業的なアーツ・マネージャーではなく事業協会にしか提供できない便益はなんであるかを、受け手の目線で考えてみてはどうかと思う。



山岡 春

「旧思想打破」と喜びを記したのは、翌年に市制施行を控えた大正11年、山岡春が公会堂建設委員会に参加を求められた時でした。社会での仕事は男性がやるものと思われた時代、女性が公の活動に参加を認められるのは稀有のことでした。当時、山岡春は泉南婦徳会の会長をしていました。この婦人会は「母心」を合言葉に家庭で働く家事労働者の講習や慰安をしたり、敬老会、会員の意見発表等も行ってきました。そして次のことを新聞に投書しました。「平素誰も自由に入出し、図書雑誌を縦覧し、なにか研究をされて演説会を開くとか、音楽会を催して市民の高尚なる趣味を養うとか、講演会を開くとか、団体の清き集会場として用いる」公会堂がないのは「母として青年の心を思うときは同情に耐えない」ので「バザーをなすとか、音楽会を催して基金の幾分かを得るとか苦勞を尽くす」と述べたのです。これをきっかけに集会場が欲しいと思っていた男性側から呼びかけがあったのです。実際婦徳会は早速バザーを開き、当時としては珍しいパンを売ったり、蓄音機を回したり物品の寄付や呉服販売で600円も利益を得ました。この催しは公会堂建設運動を宣伝する大きな力になりました。そして独自に寄付金募集を行い、総計2350円、寄付金総額の3.5%になりました。また落成記念は、婦徳会の主導で「社会と家庭」という講演会を開催しています。公会堂の使い方の見本を見せてと言っているでしょう。そして、婦人会は音楽会、講演会、女子夜学校に使用しました。

このような大きな力を出した女性たちのリーダーの山岡春はどのような経歴でしょうか。

明治直前に生まれた春は母の裁縫で育てられた^{キリスト}基督教徒です。宣教師の援助で基督教主義の梅花女学校で学び、第1回卒業生となります。その後宣教師の家族と生活を共にし、岸和田出身の山岡邦三郎牧師と結婚。任地で基督教徒の婦人会を運営し、基督教婦人矯風会の会員でもありました。明治末に岸和田にきましたが目立った活動はしばらくありません。末子が通う小学校で、暑くなると朝会で倒れる子供がいることを聞いた時に立ち上がります。学校に日覆いを作ろうと寄付集めを開始。多くの女性の賛同者の名前を公表して募集をする方法で、短期日に多くの寄付を集める事に成功しました。この活動は行政を動かし、雨天運動場建設が実現したのです。この女性の力を生かしたいと作られたのが、「母の会」。当時の女性の会といえば紋付姿の愛国婦人会しかなかった時期、母という立場で集まった百余名は、自分の修養だけでなく、家事労働者を教育することも行いました。そのころ朝日新聞社主催で婦人会関西連合大会が開かれ、参加団体の代表者で構成された発起人会の座長に選ばれました。それは視野を広げることにつながります。泉南地域の女性団体と連合して話し合うことも行いました。「母の会」はその後「泉南婦徳会」となり、市制施行後は「岸和田婦人会」となります。そのなかでの公会堂建設運動参加でした。

この経験は、女性の活動の場所を作ろうと婦人館建設に進み、完成後は、「婦人講習所」「児童妊産婦健康相談所」の看板を掲げ、毎週1回女子夜学校を開き、14年間にわたって国語・珠算・裁縫・編物・生花を教えました。このような活動ができる女性を行政は放ってはいません。大正末期から大阪府で始まった方面委員(今の民生委員)制度が岸和田で実施されるとき、岸和田婦人会の代表山岡春、愛国婦人会の代表舟木凡子の二人が任命されました。府下で最初の女性方面委員でした。母心を合言葉に進めてきた活動が評価されたといえます。一方で、女性に行政の一端が委ねられたともいえ、旧思想打破は実現されつつあるように見えますが、性別役割分担の範囲であったようです。

自泉からフランスへ

会 員 森田 美穂



昨年の夏、第15回フレッシュコンサートに出演させて頂いた2日後、フランスの学校で音楽を学ぶため、パリに向け出発しました。コンサートには、岸和田高校や大阪音楽大学の友人、大勢の地元の方が聴きにきて下さり、応援の声を頂いたおかげで、皆様からたくさんの元気をもらってフランスに来ることができました。

到着後、フランス人がバカンスの真っ只中、音楽院受験のために2つのスタージュ（講習会）に参加し、9月末オーベルヴィリエのコンセルヴァトワール（Conservatoire d'Aubervilliers）に入学することができました。現在学校ではクラリネット、室内楽、オーケストラを学び、並行して語学学校にも通っています。

大学の第二外国語の授業と、渡仏前3カ月間勉強しただけの私は、フランス人を前にすると単語を並べるので精一杯でした。何かフランス語で質問したものの、返事が聞き取れず結局大事なところは英語（当初私の英語レベルはフランス語よりはましでした）。フランス人はフランス語しか話さないとよく聞きますが、実際は多くの方が英語を理解し話すことができます。しかし肝心のクラリネットの先生が英語はゼロで、（本当は話せるのかもしれませんが…）講習会中はレッスンを録音し、分からなくてもoui oui!と答え、家に帰って理解し直すという状況でした。

音楽院では、オーケストラ、室内楽のコンサートが年に数回あり、私のクラリネットのクラスでは約月1回のペースで発表会のようなものがあります。演奏後には皆で意見交換をし新たな課題に向かいます。コンセルヴァトワールは公立の音楽院で、生徒は国籍も人種も様々、小学生から大人

まで通っています。そしてフランスの学校は休みが多い！年に5回バカンスがあります（なんて羨ましい！）。海外からの留学生は割と休みも練習に明け暮れるのですが、フランス人はしっかりと休むそうです。

パリは「芸術の都」と言われるように、数えきれないほどの美術館や教会、美しくまた斬新な建築物、毎晩オペラや音楽会が開かれる劇場、流行を世界に発信するファッションブティックなど、その空気に触れるだけで感性が刺激されるものが溢れています。勿論私も芸術家が集まるこの街で音楽を学びたいと思って来ました。

しかしそれらと並ぶように感じる魅力は「多民族多文化の街」であるということです。もともとどんなジャンルの音楽も聴くのが好きな私は、街角やカフェで演奏している人を見つけるとよく立ち寄るのですが、演奏者はアコーディオンを弾くおじさんや、サクソでジャズを演奏する人、民族衣装を着たアフリカンもいれば、コンセルヴァトワールに通うオペラ歌手の卵まで！そして劇場から街角まで、音楽が人々の近くにあり、生活や文化が違って同じように楽しむ人々がいるのです。

自泉でのコンサート後フランスに来て気がつけば半年が経ちます。私にとって全てが新しく難しいこともありますが、今こうして音楽を学べる幸せを感じ、応援して下さる人々に感謝する日々です。パリの街で感じた音楽の力というもの信じ、今後私の経験をどのように発信することができるか模索しながら、岸和田の皆さまにお会いできることを楽しみにして修行を続けようと思います。

Cultural Hot Spot In Kishiwada

Swing Idol 結成50年の老舗バンド 「スウイングアイドル」



クラブ部長 須田さん

管楽器を中心としたブラスバンド。室内やコンサートホールはもちろん、マーチングスタイルや、最近では派手なパフォーマンスを繰り広げながら演奏するバンドも見られる。その中でジャズ、特にスウイングを中心とした活動を行っているのが「スウイングアイドル」だ。結成は49年前。その間、トロンボーン奏者として、また主要メンバーとして関ってこられた須田徳彦部長にお話を聞いた。

モットーは楽しく、おもしろく

スウイングアイドルは昭和36年、岸和田産業高校の同窓生が集まり、愛好会としてスタート。「私のひとつ下に森 可秀君（故人）というのがいて、彼が中心となって結成しました」と須田さんは当時を振り返る。

結成当時のメンバーは5人。当時はプロのジャズバンドが全盛で、そんなフルバンドが目標。やがて公民館活動の一環となり、メンバー数も25人前後にまで増加。「5周年のとき、各々の技量に合わせた譜面を書いた方が、自分らしいものができる」と森君が発案しまして。彼は市役所に勤めながら音楽大学の夜間部に通って勉強し、オリジナル曲を作り、アレンジもしてくれました」。

そんな森氏の努力もあって10周年の時にはLPレコードをリリース。「反響があってテレビにも出演したり、府の奨励賞をもらったりもしました。すべては森君のおかげです」と須田さんは故人を偲ぶ。

現在のメンバーは15人。年齢層は30代から60代までと幅広い。発表の場は公民館の催しや出前公演、NPO法人が開催するダンスパーティーなど。いよやかなの郷では毎年、クリスマスの日に演奏を披露。しかし、腕前を競うコンクールには不参加。それについて須田さんは「私たちのモットーは楽しく、おもしろく。レベルを上げようとするとプレッシャーがかかります。アマチュアバンドは一人一人の楽しみが大切だと考えています」と話す。

世代交代で再スタート

結成当時の5名のうち、現在まで参加しているのは3名。今まで中心となって活動を支えてきたが、そろそろ年齢も70歳。そこで若い人にバトンを渡し、来年迎える50周年を節目に再スタートを切る予定だ。しかし、須田さんは「全く楽器の経験がない人は苦勞します。小学校や中学校、高校などで経験のある人はblankがあっても大丈夫ですが、初めての人は付いていくこともとても難しいですね」と、やる気だけでは対応できない難しさを示唆する。

音楽文化を支える住民主導のバンドとして、岸和田では最も古いグループのひとつである「スウイングアイドル」。半世紀の歴史を刻み、今、世代交代を迎える。今後はどのような展開を行っていくのか、期待が促される。



いよやかなの郷でのクリスマス演奏(2009.12.23)

きしわだ昔話歳時記 第二話

「ばあさんのひな祭り」

劇作家 藤田 保平



どーと昔のことやけどね、三月ていうたら何ちゆうても、ひなさんの祭りやのう。さーいよ、ひなさんの祭りにいったら女子の節句、桃の花咲く時分やさかい「桃の節句」ともいうわのう。

山のねきの村に、ぢいさんとばあさんが住んどった。田アへ行くのも、山へ行くのも、川へ洗濯せんたくに行くのも二人一緒の仲の良さやった。

その年はどういふもんやろか、年の暮れから西の風がよう吹いて、雨も雪もえらい少のうて、たいがい寒い日が続いたんや。

年が明けたら、ちっとはましになるやろかえて村の者もんらもうちやっただけど、なかなか。年が明けて「寒」に入ったらまだまん寒さむなって、日の暮れになると西の風がびゅーすけ吹く始末やった。

「この寒いのに、田アも山も行てられるかえ」て、ぢいさんもばあさんも家に籠りきりの毎日やったんや。さあ、そやのにどこでどうないなつたんや知らんけど、ころっとばあさん風邪ひいてしまった。

「大事にせなあかん、何もせんと寝てい」て、ぢいさんがいうのに、ばあさんは、「こんなもんぐらいで寝ちやったら勿体ない。わたい今までも風邪ぐらいで寝たこたない」ちゅうて、世帯しやたいしたり針仕事したり。

ぢいさん、やきもき思てるうちに、どうやら風邪こじらしてしもたんかして、咳は出る、熱は出るで、どうどう、よう起きてんと寝込んでしもた。ぢいさん、頭手拭で冷やしたり、お粥かさん炊いたり、よう吞まんでいうてんに卵酒こしらえたり、ほら、一所懸命に看病した。節分もすんで春になつても、ばあさんようなるどころかどんどん弱って行つた。

暦が三月に入った日、ばあさんは苦しそな息を吐きながら、ぢいさんに「わたい今度こんだちゅう今度こんだはもうあかんよに思わ……そいで一生の頼みや。……あさつては『ひなの節句』……わたい、娘時分から一ペン、ひな人形飾ってみたいと思ちやつたんや。この歳になつて、何アホな事て思ちやつ

らんけど、一ペンでええさかい、ひな飾り見せてもらえんやろか……」

ぢいさん、腕組みして、それ聞いちゃったけど、うんともすんともいわず、そのうちにパイと外へ出て行つた。

その日は夕方暗くろなつて戻つてきて、ばあさんにお粥食かべさして、翌朝あもお粥食かべさすなり外へでて、その日も夕方暗くろなつて家へ戻つた。ばあさんは「無理なこと頼んで悪かつたなア」て心の中で思ちやつたけど、二人とも何にもいわんとその晩寝てしもた。

翌朝あ、朝日がさすのを待ちかねたよにぢいさんは、「どな、ちっと気分ええか？そうか、ほなちよつとここ開けるど」て裏の障子を開けた。

ばあさん「ひゃー」て眼エ廻すほどびっくりした。

裏の山の段々島一番上に、菜の花を一抱えも束ねて、男雛、女雛。その両脇に満開の桃の木は雪洞ぼんぼりの見立てか。次の段には三人官女。五人雛子は茶の木で、その下の段には笹を束ねた左大臣、右大臣まで並んでる。

「どや、ひなさんの出来悪いけど、大きさだけは日本一のひなさん飾りや」

その日から、ばあさんの風邪、薄紙はぐよになつて、程なしに、二人揃つて田アや山へ行く姿を見た、ていふはなしや。ピッカラドンのポン。

剣道と静坐と
そして文化と…



理事
松端 孝元

しのぎ
「鎧を削る」あるいは「鏝ぜり合い」といえば、両者相譲らず激しく争っている様子をさす言葉です。もちろん剣道から出た言葉です。まだあります。「鯉口を切る」とは、相手の出方によってはいつでも対応できるように準備しておくことですし、「伝家の宝刀を抜く」のは、今まで隠していた必勝の技を使うことです。どうも物騒な話になりそうですが、「元の鞘におさまる。」ことになれば、結構なことです。このように剣道から出た言葉は、今もまだ十分に使用されており、日本人の生活様式の中に溶け込んでいます。

剣道とは、全日本剣道連盟では、「剣の理法の修練による人間形成の道である。」と定義づけております。私はこの上に「剣道とは、日本固有の伝承的運動文化である」という言葉を付け加えたいと思っています。剣道には、重要な要素として「坐る」ことと、「紐を結ぶ」ことが含まれています。また、袴をはきますが袴の腰板は、背筋を伸ばし、腰骨を立て、丹田呼吸をするのに都合よくできています。「腰を据える」とか「腹に力を入れる」あるいは「腹をくくる」には腰骨を立てないことには絶対にできません。それをさらに確実にするのが「坐る」ことです。紐を結ぶこともそうですが、これらは我々日本人に伝えられてきた伝承文化と言えると思うのです。ところが今では、「豊から椅子」へ「紐からファスナー」へと生活様式がすっかり変わってしまいました。現在社会の乱れは、こここのところに原因があるように思えるのです。

私は、静坐を習い始めて20数年たちます。剣道のほうは、もう50数年になります。今もまだ毎日、竹刀は握っていますし、毎朝30分は坐っています。剣道と静坐から見えてくることは、「坐る文化」の大切さです。音楽や絵画についてはさっぱりわかりませんが文化事業協会の活動指針に、こんな視点も加えてほしいものだと思っています。

「お気をつけてお帰りください」「有難うございました」「次回も是非いらしてください」

今日も無事にコンサートを終える事ができた。来て頂いたお客様の笑顔を見ると、演奏家としてこの上ない感謝の思いでいっぱいになる。

20代の頃は一生懸命ただ歌っていた。「え～、曲目解説も自分ですのですかっ？」などと余裕がなかった。30代では、歌に感情が込められる様になりコンクールでも上位に名前が残る様になった。ほとんどのコンクールでは、年齢制限ぎりぎりに入賞した。35歳で結婚し、二女にも恵まれ、自分の歌に余裕ができた。40代では、リサイタルやディナーショーをする度にトークが楽しくて仕方がない。

20代に「コンサートでは、お話なんか出来ません！」と言った私が……(笑)

年齢を重ねる毎に、自分の歌に対する思いが変わってきた。もともと声種が日本歌曲には不向きなコロラトゥーラ・ソプラノの為、オペラばかり歌ってた私が、いつの間にか日本の歌や、童謡などもレパートリーとなった。そして今、50代に入り自分の経験をもとに、若い新人音楽家たちにアドバイスをしていきたいと思う。自泉会館で行われているフレッシュコンサート(年5回)や、ミューズコンサート(年2回)などを中心にサポートしつつ、心に残る歌を歌い継ぎたい。

音を紡いで



ソプラノ歌手
角野 芳子

協会主催の事業にご来場いただき、有難うございました。
アンケートにご協力いただいた方の感想を紹介させていただきます。

第17回自泉フレッシュコンサート

平成21年12月20日(日)に、ソプラノとピアノ演奏のコンサートを実施し、103人の入場者がありました。

〈皆さんの声〉

- 若いアーティストを応援し、才能を育てて欲しいと感じました。
- もっとポピュラーな曲も交じっていても良いかな。
- 歌の前に、曲目についての説明が分かり易かったです。
- 歌もピアノも間近で聴けて迫力がありました。
- 席が同じ高さなので、ステージが一段高ければ良く見えただか。
- 休憩中のお茶サービスがとても嬉しかったです。



第18回自泉フレッシュコンサート

平成22年1月10日(日)に、ピアノとフルート演奏のコンサートを実施し、76人の入場者がありました。

〈皆さんの声〉

- 曲の解説があつてとても親切、素人に分かるように、興味をもつようにしてくれて良かったです。
- フレッシュコンサートの名にふさわしい、若さ溢れる輝くとても良いコンサートでした。
- 演奏中は少し寒かったが、休憩時のteaのおもてなしが嬉しかったです。
- 大きなホールとはまた違って、素敵な会場で心地よくクラシックを楽しめました。
- 後方の席に座ったので、演奏者が少し見えなかったのが唯一残念です。
- 重厚な建築物にふさわしい催しでした。



「紙ふうせん」ハートフルコンサート

平成22年1月30日(土)に、昼夜2回公演のコンサートを実施し、述べ194人の入場者がありました。

〈皆さんの声〉

- 一流のアーティストをこんな間近で見れて感動しました。
- お二人の歌が心洗われるほどきれいで素晴らしかったです。
- 手話を見ながら歌を聴くことで、心の中に沁みてより感動して涙しました。
- 曲と曲の合間のおしゃべりがとても良く、客席と一体感がありました。
- コンサートで手話を見るのは初めて。リズムに乗りながら手話するなんてすごい。
- ピアノのムーンリバー等とても味わいがありました。
- ほのぼのとした雰囲気、歌の成り立ち、昔のエピソード等お二人の人柄に魅せられました。
- 何年ぶりかで聴いて、青春時代を思い出しました。
- タイトルどおり、楽しい心温まるコンサートでした。



チェンバロの「解き明かし講座」チェンバロを見て触れてみよう!

平成22年2月21日(日)に、チェンバロの「解き明かし講座」とコンサートを実施し、98人の入場者がありました。

〈皆さんの声〉

- 演奏が、中世にタイムスリップしたみたいで素敵でした。
- チェンバロの音色を近くで聴くことがないのでとても良かったです。
- チェンバロのイタリア式のものゝは柔らかな音が、ドイツ式のものゝは艶やかな響きのある音でとても素敵でした。
- チェンバロの歴史等について知るチャンスは滅多にないので、とても貴重な経験ができました。
- 貴族の楽器というイメージだったのに、こんなに身近に感じられて嬉しかったです。
- 楽器の演奏を聴く機会はあるけれど、こうして楽器の歴史や素材を子どもたちに教える企画は良いと思います。
- 素人や子どもには、写真や絵を挿入してもっと分かりやすい解説にして欲しかったです。
- ワークショップが長く、専門学校の講義のようでした。



平成22年度 定時総会開催

平成22年度定時総会を下記の要領で開催します。

日 時：平成22年5月29日(土) 午後2時より 場 所：岸和田市立自泉会館
 内容 第1部 スミスアメリカン オルガンコンサート 第2部 総 会 ①平成21年度事業・決算報告
 会員無料 (但し、申込必要、先着50名まで) ②平成22年度事業計画(予算案)
 第3部 懇親会

岸和田文化事業協会の事業 Information

第19回自泉フレッシュコンサート ～春風にさそわれて～

音楽を学びプロフェッショナルとして歩み始めた
新人演奏家によるコンサート

日 時：平成22年4月23日(金) 午後7時開演
会 場：岸和田市立自泉会館ホール

出演者：松野 友美(ピアノ)
友田 麻依加(ピアノ)
永井 まゆ子・森土 愛子(ピアノデュオ)
小澤 沙緒里(ヴァイオリン)

入場料：一般前売 1,200円
会員前売 1,000円(当日200増)



スミスアメリカン オルガンコンサート

自泉会館お宝のオルガンを使用したコンサート

日 時：平成22年5月29日(土) 午後2時開演
会 場：岸和田市立自泉会館ホール

出演者：大森 幹子(オルガン奏者)
鈴木 開(オルガン奏者)
角野 芳子(ソプラノ)

入場料：一般前売 1,500円(当日300円増)

岸和田文化事業協会会員は入場無料!
(但し、申込必要、先着50名まで)

■お問い合わせ 岸和田文化事業協会事務局まで TEL/FAX 072-437-3801 Eメール fontaine@sensyu.ne.jp

文化情報

This is Quintet

～見果てぬ夢～

二人の作曲家(シューベルト・ブラームス)、
最晩年の深遠なる世界

日 時：平成22年5月8日(土) 午後6時開演
会 場：岸和田市立自泉会館ホール

出演者：Cl. 延原弘明
Vn. 赤松由夏・池上尚里
Va. 角田知子
Vc. 後藤敏子・成川昭代

主 催：BIN企画
入場料：2,000円(当日500円増)
問合せ：090-1711-7815(池上)

2010 第33回 府美協 巡回展「岸和田展」

入場
無料

日時：4月20日(火)～25日(日)
午前10時～午後5時(初日正午オープン/最終日午後4時迄)
会場：岸和田市立文化会館 マドカホール

「第61回岸和田市市展」への出品を募集いたします。

自作未発表のものに限ります。
資 格/平成7年4月1日以前に生まれた人。 出品料/500円
※作品の額縁などにはつり下げ用のひもを付けてください。
※詳しくはマドカホールにて配布中の募集要領をご覧ください。

会 期	部 門	展示期間
第1期	洋 画	5月16日(日)～ 23日(日)
第2期	染 織・陶 芸	5月30日(日)～6月6日(日)
第3期	書・日本画	6月13日(日)～ 20日(日)
第4期	写 真・俳 画	6月27日(日)～7月4日(日)

問合せ先：マドカホール(担当：西山・中村) 電話：443-3800 月曜日休館

「ぬーべるふおんてーぬ」 文化情報欄に 掲載希望の会員の皆様へ

「ぬーべるふおんてーぬ
Vol.28 文化情報欄」に掲載
希望の方は、岸和田文化事
業協会まで原稿をお持ちく
ださい。
【原稿締切 6月15日(火)】
但し、掲載範囲に限りがご
ざいますので希望に添えない
場合もあります。ご了承ください。

編集後記...

「ぬーべるふおんてーぬ」平成21年度の最終号をお届けします。
今年度の編集の基本方針は、岸和田を誇りに思える、岸和田
が好きになる、岸和田をもっと知るといったことでした。『岸和
田の文化』にこだわり、岸和田ゆかりの人々や、歴史再発見、
創作民話、文化を紡いでいる団体、建造物や庭園などを採り上
げてきました。

一本の柱がすつとおり、装丁もきりりとなったと、広報部
会員は自画自賛のところですが、皆さまのご感想はいかがでし
ょうか？

新しい年度も編集の基本方針からそれずに編集をしまいい
ます。皆様のご支援、ご協力をよろしくお願い申し上げます。
(紙野)

nouvelle Fontaine vol.27

発行：岸和田文化事業協会
発行日：2010年3月25日

◆事務局
〒596-0073
岸和田市岸城町5-10 岸和田市立自泉会館内
TEL/FAX 072-437-3801
Eメール fontaine@sensyu.ne.jp

◆編集委員 和田正則・紙野陽子・歯黒猛夫
藤田保平・本郷元子

<http://www2.sensyu.ne.jp/fontaine/>

岸和田文化事業協会

検索